みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Development and the People : Social History of Labour Migration : Malaita, Solomon Islands, 1930s-1990s

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-02-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宮内, 泰介
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003514

ソロモン諸島マライタ島における出稼ぎと移住の社会史
——1930～1990年代——

宮　内　泰　介*

はじめに
I　出稼ぎと移住の社会史
1　海岸部への移住
2　戦前の出稼ぎ
3　労働部隊
4　未婚男性の単身出稼ぎ
5　既婚男性の単身出稼ぎ
6　家族での移住
7　町での労働とリリウ層
8　未婚女性の出稼ぎ・移住
9　出稼ぎに出ないという選択
10　“教会の仕事”
II　出稼ぎと移住の社会学
1　ライフコースにおける出稼ぎ
2　構造から見た出稼ぎと移住
3　生活戦略から見た出稼ぎと移住
おわりに

はじめに

発展途上国の村落地域における開発や発展の問題を考えようとするとき，陥りやすい誤りの1つは，歴史を無視することである。この地域の現状はこうである，だからこうした開発や発展が必要だ，と言うとき，歴史の分析が抜け落ちていることが少なくない。一見静的に見える村であっても，よく見てみると，非常にダイナミックに動いていたり，あるいは，一見“伝統的”と思われる部分が比較的近年のものであったりする。

発展途上国の村落地域はどこでも，程度の差こそあれ，世界システムの中でさまざまな変容を遂げている。したがって，歴史を見るということは，まず第1に，地域社会の構造を歴史的に解きほぐすということである。今現れている構造を分析するには，歴史の分析を抜きにはありえない。

* 北海道大学文学部

Key Words : Solomon Islands, labour migration, household strategy, life history
キーワード：ソロモン諸島，出稼ぎ，労働，生活戦略，ライフヒストリー

第2に，歴史を見るということはまた，住民の主体性を見るということでもある。住民たちがこれまで選択してきた道（場合によっては選択を余儀なくされてきた道も含めて）を見ることによって初めて，本当の意味での「エンパワメント」を考えることができる。

本稿では，そうした村の歴史の中でも，出稼ぎと移住という側面にしぼり，ソロモン諸島マライタ（Malaita）島の住民たちがたどってきた道を考えてみたい。出稼ぎや移住は，世界システムという構造と住民の生活戦略との間の相互作用を見るのに適していると考えられるからである。

本稿では，ソロモン諸島マライタ島アノケロ（Anokelo）村の住民を事例として取り上げる。私は，アノケロ村での調査を1992年から継続的に行っており，これまで主に，住民の生活戦略や環境とのかかわりについての研究成果を発表してきた（宮内1995; 1998a; 1998b）。

アノケロ村は，マライタの州都アウキ（Auki）から北へ海岸沿いの道路を40キロほど上ったところにある村である。この村は，キリスト教の一会派であるSSEC（南洋福音伝導会）の布教者（ソロモン諸島民）によって1918年にできた。とはいえ，現在の住民たちが住み始めたのは1930年代からで，内陸部のいくつかの地域からさまざまなルートで集散離合しながら今のアノケロ村を形成した。SSECの教会を軸に形成された，いわばキリスト教共同体であり，現在は，同じ教会に属している周囲の小集落を合わせて約30世帯約200人が生活している[1)]。

1995年8月，1996年7－8月，1998年2－3月の調査期間の間に，このアノケロ村の住民，とくに30歳以上の住民から，一人ひとり可能な限り生活史の聞き取りを行ってきた。聞き取りはピジン・イングリッシュで行った。聞いた話は多岐に及んでいるが，本稿は，その中から出稼ぎ・移住に関する部分に関する部分を中心に記述し，分析を加えたものである[2)]。

記述の中では，住民自身の語りをなるべく多く入れた。そこには，住民を客体として描くのではなく主体として描くことを試みたい意図と同時に，分析からこぼれ落ちる部分を含めることで，社会史としてのふくらみをもたせたいという意図がある。もとより，ピジン・イングリッシュという私にとっても彼らにとっても母語でないものを媒介にしているので，“語り口”を描いたというところまではいかないし，また，私の編集が加わっていることも否めない。もっとも，聞き取りという作業自体，聞き手と話者との相互行為であるから，以下の記述も，私の関心と彼らの語りとの相互作用の産物であると言える。

I　出稼ぎと移住の社会史

1　海岸部への移住

前節で述べた通り，アノケロ村は，いわゆる“伝統的な村”ではない。

現在の住民たち，あるいはその親や親戚たちがアノケロ村に移住してきたのは，さまざまなルートがある。

いずれも内陸部出身であるが，その移住のルートによっていくつかに類型化できる。第1のグループは，1930年代に，いくつかの内陸部の村から，いくつかのルートを経てアノケロ近くのコオンゴリ（Ko'ongori）村（同じく SSEC の新しい村）に移住し，戦争中に内陸部の別の村に移住したあと，戦後マアシナ・ルール期にアノケロ村に移住してきた。マアシナ・ルールは，1943年ごろからマライタ島でイギリスの支配に対抗して起こった政治的・経済的な自治・独立運動であり，その運動の中で，海岸部の村に降りてきて同胞が一緒に生活しようということが唱えられた。アノケロ村はそのときの拠点の「町」（ピジン・イングリッシュでタウン［taon］と呼ばれた）になり，多くの住民が移住してきたのである。第2のグループは，いくつかの内陸部の村から，1920年代にアノケロの少し内陸部のケルタバ（Keretaba）に移住し，そのあと1930年代にアノケロ村に移住した。そのあと1930年代にコオンゴリ村に移住し，第1のグループと合流し，そのあとはそれと行動を共にした。第3のグループは，戦前までは内陸部を移住しており，マアシナ・ルール期にアノケロ村に移住してきた。さらに，それ以外に，少数であるが，戦後アノケロ村に移住してきた家族もいる。

いずれも，戦前から戦後にかけて，内陸部の非クリスチャンの村から，コオンゴリやアノケロといったクリスチャンの村に合流するために移住してきたという経緯は共通している。そして最終的にアノケロに集まったのは，マアシナ・ルールをきっかけにしてであった。マアシナ・ルール期に以上のルート以外のルートでアノケロ村に移住してきた人々も他にいたが，マアシナ・ルールが終息したあと，それらの人々は内陸部の村に戻った（必ずしも元いた村に戻ったとはかぎらず，別の内陸部の地域に戻った例もある）。

こうした海岸部のキリスト教の村への移住は，マライタ島では広く見られる典型的な移住形態であるが[3]，その背景は何か。

まず住民たちの語りではおおよそ次のようにパターン化されて表現されている。「○

○さんがアノケロ村やコオンゴリ村で布教活動をやっていた。(内陸部の集落で) 一緒に暮らしていた△△さん (男性) が，改宗して海岸部の村に降りることを決めた」。集落全体で決めて移住することもあれば，集落の一部の世帯が移住することもあった。

こうした語りの向こう側に何があるか。語られることと推察できることを合わせて考えると，衣類・煙草などの消費物資，学校教育，そして医療へのアクセスがはやり大きいと思われる[4]。キリスト教布教者たちは，教会を中心にした村を海岸部に作ると同時に，教育機関を設置した。また，アノケロ近くのフォアブ (Fauabu) には英国国教会が病院を設けており，そこには戦前の植民地政庁があったツラギ (Tulagi) から華人商人が船で消費物資 (米，ビスケット，衣類，煙草など) を売りに来ていた。また，反植民地運動であったマアシナ・ルールが，自分たちの生活の向上も運動の大きな目標としていたため海岸部への移住を促進したという点も注目される[5]。

2　戦前の出稼ぎ

ソロモン諸島民の出稼ぎは，いわゆるブラック・バーディングに始まる。

ムンロによると，ソロモン諸島からは，1871年から1904年にかけて1万8,217人が

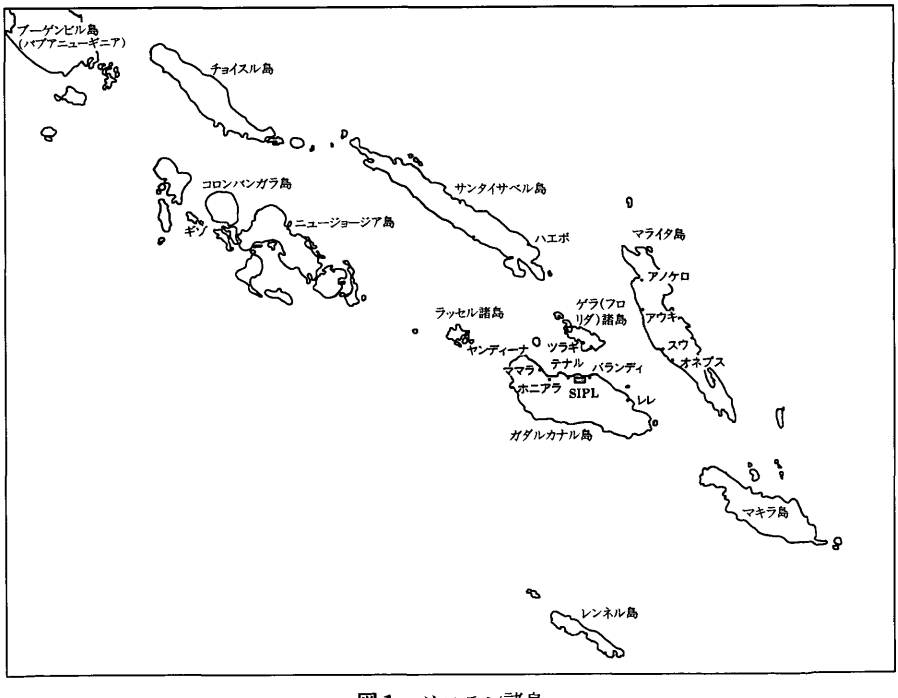

図1　ソロモン諸島

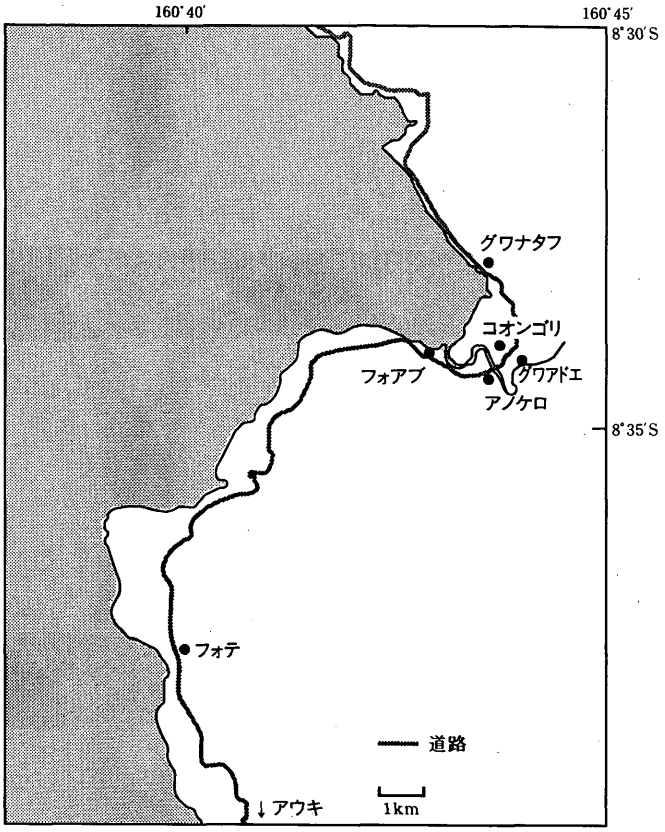

図2　マライタ島アノケロ村周辺図

オーストラリア・クインズランドへ，1880年から1911年にかけて8,228人がフィジーへ労働移民した（Munro 1990）。いずれもサトウキビ・プランテーションでの労働である。

現在のアノケロ村住民でこのブラック・バーディングを経験したものはもちろんいないが，Bさん（1923年生まれ）は子供のころ，その話を大人たちから聞いている。

「白人がやっていて，村人を盗んだ。白人は2隻の船で，鉄砲を携えてやってきた。鉄砲を撃ったので，その音で，村人たちは海岸に下りて来て，そこで捕まえられた。3年間フィジーやクインズランドで働いた。フィジーからの帰還者はフィジー語をしゃべり，クインズランドからの帰還者は片言の英語をしゃべった。クインズランドからの帰還者は，箱一杯の衣類を持って帰った」。

ブラックバーディングは1911年に終わったが[6]，そのころソロモン諸島内にココヤ

シ・プランテーションが多く生まれ，今度はそうした国内プランテーションへの出稼ぎが始まった。ソロモン諸島においてココヤシ・プランテーションが本格的に始まるのは20世紀初頭であり，これは世界的なココナツ・オイル需要の伸びに対応していた。イギリスの多国籍企業リーバース社やバーンズ・フィリップ社をはじめ，大小の企業・個人が，土地を購入したり，政府から借り上げたりするかたちでココヤシ・プランテーションが拡がっていった。第二次大戦前の段階で大小合わせて100以上のココヤシ・プランテーションがあり（Bennett 1987: 233, Table 8），3,000〜4,000人の労働者が働いていた（Bennett 1987: 176, Table 4）。そのうち，約7割はマライタ島からの労働者だった（Bennett 1987: 168）。

Bさんは，戦前，そうしたプランテーションへの出稼ぎを経験している一人である。

Bさん（当時コオンゴリ村在住）が出かけたのは，1937年から1939年までの2年間，ガダルカナル（Guadalcanal）島のママラ（Mamara）・プランテーションである。Bさんは，労働力徴集の船に乗ってプランテーションへ行った。船には白人が1人で，あとはソロモン諸島民だった。

人びとがプランテーションで働くようになった原因はいくつかある。村人からの聞き取りを総合すると，一つは，衣料や煙草などの消費物資を買うためである。とくに衣料を買うため，という意識が強かった。

もう一つは，税金である。マライタ島では1920年代に人頭税がかけられ，住民にとっては重い負担となっていた[7]。アノケロ村周辺では当時，近くのグワナタフ（Gwanatafu）村に納税所があり，この地域の人々はそこで税金を払った。Bさんによると，12歳以上の人間が人頭税を払う必要があったが，プランテーションで賃労働する前は，タロイモを売るなどして金を得るしかなかった。市場はなかったから，買いたい人が来たら直接売るという形だったという。そうやって得たお金で税金を払うのだが，税金を払わないとアウキにあった刑務所行きだった（実際に他の村にはそうやって刑務所に入った人もいたという）。また，税金を払わないとプランテーションに行くこともできなかった。Bさんは，税金が5シリングのときは払えなかったが，1シリングに下がって払えたので，プランテーションへ行くことができた，と言う。

プランテーションでの仕事はきつかった，とBさんは語る。

「昔は白人による我々の扱いはよくなかった。マスターのR氏は，非常に力が強く，厳しかった。働かないとぶたれた。そうした白人による扱いに，私たちはいつも

不満を言い合っていた。実際の仕事はコプラ作りで，月曜から火曜までは朝6時から夕方5時まで，土曜日は6時から2時までで，日曜は休日だった。賃金は1カ月6ポンドだった。ママラのプランテーションでは，マライタ島，ガダルカナル島，マキラ（Makira）島，ゲラ（Ngella）などから数十人の労働者が集まっていた。プランテーションでの食事は米が中心で，紅茶やビスケットなども食べた。2年間働いて，持って帰ることができたのは6ポンド，そのうち3ポンドは帰りにツラギ（Tulagi）の華人の店で衣類などを買った。衣類は当時1着1シリングだった。そして残り3ポンドを村まで持って帰った。帰ってきたときには，もう白人のもとで働く必要がなくなった，とホッとした」。

Bさんは1939年に帰村したが，同年から1941年にかけて，再びプランテーションで働いた。今度はラッセル（Russel）諸島のヤンディーナ（Yandina）である。その労働を終えて，帰村した直後に日本軍の侵攻があった。

Bさんとほぼ同世代のCさん（当時コオンゴリ村在住）（1924年生まれ）も，Bさんと同じ1939年から1941年にかけてヤンディーナで働いているが，Cさんは，コプラ作りではなく，マスターの「ハウス・ボーイ」として働いた。仕事は料理，洗濯，掃除などだったが，「きつかった」と言う。

BさんもCさんの例からわかるとおり，戦前の出稼ぎは，独身男性の単身出稼ぎがほとんどであった。

3　労働部隊

戦争直後の特異な労働移民の形態として，ソロモン諸島労働部隊（Solomon Islands Labour Corps）への参加がある。ソロモン諸島労働部隊とは，1943年半ばからアメリカ軍によって組織されたソロモン諸島民の労働組織であった（Bennett 1987: 291）[8]。

前節でとりあげたBさんは，この労働部隊にも参加している。

「1943年から，5カ月間ガダルカナル島のテナル（Tenaru），7カ月同島ガリビウ（Ngalibiu）でアメリカといっしょに働いた。アウキに船が来て，マライタ人を雇った。仕事は，アメリカ兵とともに，マラリア蚊を薬で駆除することなどだった。月2ポンドの賃金が出たが，当時はプランテーションでの賃金が月1ポンドだったので，高い賃金だった。川の中でたくさんの日本兵やアメリカ兵が死んでいて臭かったが，プランテーションでの仕事よりはましだった。とくにいろいろな肉やコーンビーフが食べられたのがよかった。肉以外にも米，ビスケット，砂糖が支給された。米兵とは

そんなには話さなかった。とくに黒人の英語はスラングでわからなかった。白人のはいくらかわかりやすかったが，白人と話すと，黒人たちが『同じ色の肌なのに』と嫉妬した」。

前節で取り上げたDさんもBさんとともにこの労働部隊に参加しているが，一方，AさんやEさんは参加していない。Aさんは「お前は村で女子供といっしょに残れ，と言われたから」，Eさんは「参加したかったが父親が反対して参加しなかった」，というのが，参加しなかったそれぞれの理由である。

労働部隊は，プランテーションとはまた違う，新たな経験であった[9]。

4　未婚男性の単身出稼ぎ

結婚前の男性による単身の出稼ぎという形態は，戦前から現在に至るまで，出稼ぎのもっとも一般的な類型である。BさんやCさんの戦前の出稼ぎもこの類型だった。

戦後の例の一人であるGさん（1942年生まれ）は，未婚時代の1956年から1年間，イザベル島のハエヴォ（Haevo）・プランテーションで働いた。

「最初の6カ月くりぬき作業ばかりやった。あとの6カ月はコプラ乾燥の作業を行った。賃金は月4ポンドだった。ドルで言うと8ドル。食事は基本的に米であり，また，プランテーション内に拓いた自分の小さな畑で獲れるサツマイモ，それに魚などだった。タロイモや野菜は作らなかったので食べることができなかった。プランテーションには毎月末にツラギから華人の船が来て商売を行っており，そこで衣類や煙草を買った。服は4～5シリング，ズボンが10シリング，煙草は大きいやつが7～8シリングだった」。

Gさんは1957年に村へ戻ってきて，翌1958年に結婚した。結婚してから以降は，出稼ぎには出ていない。先に挙げたBさんも，結婚してからは村を離れていない（Cさんは，I－6でとりあげる息子のLさんと1970年代以降家族で出稼ぎに出ている）。

Fさん（1942年生まれ）の例もこの類型に入る。Fさんは，独身時代の1962年，首都ホニアラ（Honiara）へ出稼ぎに出た。

「ホニアラでは最初，西洋人のためのコックをするよう勧められたが，怖くて断った。そのあとドイツ人ティシュラー氏のもとで大工として働いた。1年間働き，ホニアラのたくさんの建物や家を作った。そのあと，ガダルカナル島のバランディ（Mberande）にあるココヤシ・プランテーションで1年間働いた。グループで働いていた。たとえば10人くらいのグループで働き，朝から夕方まで一日中コプラ作りを

行い，グループで1日30袋くらいのコプラを作った。賃金は1袋あたり2ポンドだった。非常にきつい仕事だった。そのあといったんアノケロ村に戻り，そして1964年から再びプランテーションで働いた。今度はラッセル諸島のヤンディーナのココヤシ・プランテーションだった。仕事の中身はバランディのときとほぼ同じだった」。

Fさんは，1996年にアノケロ村に戻り，同年，継父にすすめられてクワイオ（Kwaio）（マライタの言語グループの一つ）の女性と結婚し，以降再び出稼ぎに出ることはなかった。

なぜ未婚男性による単身の出稼ぎが多いのか。あるいは，なぜ男性たちは結婚すると村に戻る傾向があるのか。アノケロ村の近隣のグワアドエ（Gwa'adoe）村のQさん（1960年前後生まれ＝推定）は，「そういうものだ」と語る。Qさんは1977年から6年から大洋漁業（現マルハ）の合弁会社ソロモン大洋の船で働いた。月給80～100ドルの給料をもらっていたが，1983年，村に戻って結婚した。「これはソロモン人のやりかたで，外で働いてまた戻ってくるというのがここでは普通なのだ」。

出稼ぎは未婚の男性が主に行うもので，一定期間の出稼ぎの後村に戻って結婚し，村に定住する，という規範がある（あった）ことがわかる[10]。

5　既婚男性の単身出稼ぎ

「結婚したら村に戻ってくる」，あるいは「村に戻ってきて結婚する」という規範が住民自身によってよって語られ，実際にもそのパターンが一般的であるものの，結婚後の男性が単身で出稼ぎに出る例も，意外に少なくない。

たとえばAさんは，戦争中の1942年（推定）に結婚しているが，そのあとの1955年と1957年に出稼ぎに行っている。1955年の出稼ぎはギゾ（Gizo）のプランテーションだった。

「大きな船がフォアブ［先述したように，アノケロ村の近くにある，英国国教会経営の病院の所在地］にやってきて，その船に乗っていた一人の男が村々を回って人を集めた[11]。ステーション［プランテーションのことを住民は通常ステーションと呼んでいる］のあったギゾ（Gizo）まで4日かかった。ギゾのステーションでは，朝の7時から4時まで働いた（お昼は1時間休憩があった）。このステーションはマライタ島からの人間ばかりだった。毎日コプラを作り，それを船に運んだ。コプラの袋を船に運ぶのは，たいへんきついしごとだった。しかし賃金は月3ポンドとよくなかった。ステーションでの食事は，牛肉の缶詰，米，ビスケット，紅茶だった。サツマイモやタロイモはなかった。仕事が終わると会社が作った大きな家で寝た。家の中にはたく

さんの部屋があり，1つの部屋に10人が寝た。ギゾには商店がなかったので，得た賃金で服，ブッシュ・ナイフ，煙草，（煙草の）パイプなどをホニアラの中華街（Chinatown）で買った」。（［　］は筆者による注。以下同じ）

Aさんは，このあと1957年に1年間ガダルカナル島のレレ（Rere）とバランディの2カ所のプランテーションでそれぞれ半年ずつ働いているが，1955年のギゾのときも，このときも，いずれも妻は村に残している。

Jさん（1945年生まれ）の例も同様である。

「村にあった小学校を出たあと，オネブス（Onebusu）の聖書学校（Bible School）に1年通い，そのあとスウ（Su'u）の中学校（Senior School）に2年通い，またオネブスにもどった。1969年から1970年にかけてはSSECの宣教者（evangelist）として村々を回った。そのあと，1970年から3年間，ホニアラにある，ニュージーランド人の建設会社で大工として働いた。この間の1972年，ホニアラのメンダナ・ホテルで現在の妻と知り合った。彼女はクワラアエ（Kwara'ae）［ファタレカの隣の言語グループで，同じ北マライタ諸語の一つ］で，当時ホニアラで親戚と一緒に暮らしていた。1972年2月のある水曜日にアノケロ村に戻って結婚式を挙げ，その週の金曜日に一人で飛行機に乗ってホニアラに戻った。彼女の方は，そのままアノケロ村に残り，6カ月後自分の村に戻った。1973年から1974年にかけてはまた別の建設会社で大工として働き，1974年8月から1978年にかけて，中央政府の森林省で働いた。森林省ではやはり大工として働いたのだが，ニュージョージア（New Georgia）島，コロンバンガラ（Kolombangara）島といった森林省のプロジェクト（植林プロジェクトなど）があるところで働いた。この時の給料は月給で78ドルだった。森林省で働いていた1976年，交通費を払って妻を呼び寄せ，初めて一緒に暮らし始めた。1978年にはホニアラに戻り，翌1979年には政府の仕事を退き，民間の工事請負人（コントラクター）[12]として働いた。そのあと1980年には政府の住宅局（Housing Authority）でマネージャーとして働いた。仕事で体が疲れていた。病気になったら村へ帰ろうと思っていた。1984年，マラリアや風邪で4度も中央病院に行くはめになり，潮時と考えて，村に帰った。以降はずっと村にいる。村を空けていた間のココヤシなどは，父の兄弟であるBさんが面倒を見てくれていた」。

なぜ妻をおいて再び単身出稼ぎに出たのかと聞くと，Jさんは「わからない。頭がおかしかったんだろう」と，いくらか後悔しているふうである。私としてはこう解釈してみた。当時村の中では，家族で出稼ぎに出る（移住する）という形態は一般的ではなく，単身出稼ぎ，とくに独身男性による単身出稼ぎが規範であった。しかし，結

婚後も外で働きたいという意向があった場合，妻を連れていくよりも，妻を村に残し，単身で出稼ぎに出るというのが，当時の規範からはより正当性を帯びていた。

6　家族での移住

アノケロ村の事例では，家族での出稼ぎ・移住が一般的になるのは，1970年代である。これにはSIPLという出稼ぎ先の条件が密接に結びついている。

SIPL（Solomon Islands Plantation Ltd. ソロモン諸島プランテーション会社）は，連邦開発公社（Commonwealth Development Corporation）とソロモン諸島政府との合弁会社によるアブラヤシ・プランテーション会社である。1971年にアブラヤシの植え付けが始まり，1976年から収穫と搾油が始まった。SIPLは，当初3,335ヘクタール，現在3万373ヘクタールの広大な面積を誇り，今に至るまで国内唯一のアブラヤシ・プランテーションであり，毎年1～2万トンのパームオイルと数千トンのパーム核オイルを輸出し，ソロモン諸島の総輸出額の10パーセント前後を占めている（Douglas and Douglas 1989: 503; Statistics Office 1987; 1995c）。

この国家プロジェクトによるプランテーションは，そこに広大な生活空間を作り出した。住居，学校，医療などが整ったプランテーションだったため，人びとは家族とともにそこに移住し生活をすることが容易だった。プランテーション側としては，そうやって安定した労働力を確保する必要があったと推察される。

Lさん（1959年生まれ）は，小学校7年生（Class 7）を修了後の1975年，父母とともにSIPLへ出稼ぎに出た。すでに親戚がそこで働いていたのがきっかけの典型的なチェーン・マイグレーションである。

「最初の2年間は受粉の仕事だった。1978年からはSIPLの建設部門に移った。村に戻ってから家を建てたりする技術が身につくと考え，この部門を選んだ。ここでプランテーション内の労働者住宅，経営者住宅，工場などの建設に携わった。朝7時から夕方4時まで（1時間の昼休み）の8時間労働で，週5日制だった。給料はあまりよくなかった。最後の段階（退職前）で日給10.68ドルだった。自分は労働組合の建設部門代表だった。SIPLの労働組合は強かった。各部門に代表がいて，賃上げや生活環境向上などを要求した。たとえば，最初住宅には電気がなかったが，要求してつけさせた」。

SIPLに出稼ぎに行っている間の1978年，Lさんは，バイグ（Baegu）（北マライタ諸語の一つ）の女性と結婚をする。そして，一緒にSIPLに住むことになる。

「子供がいない間は妻もSIPLで働くことがあったが，子供ができてからは短期で

働く以外は家の仕事に従事した。子供4人のうち，末の子供以外は皆，このSIPL時代に生まれている。SIPLは6つのエステートに分かれており，それぞれに学校や診療所がある。子どもたちはその学校に通った。さまざまな島から労働者が集まっていたので，学校での会話はピジンである。SIPLで生まれた3人の子供はみな，ファタレカ語よりピジンの方が得意だ」。

1991年，Lさんは妻や子供と一緒にアノケロ村に帰村する。なぜ戻ったのか，ということについてLさんはこう語る。

「疲れた。引き留められたが，子どもたちが自分たちの土地のことを知らなければならないと考え，帰村した。建築の技術を覚えるためだったし，いずれ戻るつもりだった。たくさん働いても大きな金にはならない。村に帰りたかった。アノケロ村から数家族SIPLへ出稼ぎに出ていたが，みんなすでに村に戻っている。皆同じ気持ちだと思う」。

7　町での労働とリリウ層

1980年代以降の移住／出稼ぎを特徴づけるものは，首都ホニアラへの移住／出稼ぎである。そして，それは町での“ぶらぶら歩き”（リリウ，*liliu*）層の創出と密接に関連している。

村からホニアラへ来て，仕事を探しながら（あるいは仕事を探さないで）町を“ぶらぶら”している人々の一群がいる。主には独身の青年男子である。リリウという言葉は，マライタ諸語でぶらぶら歩きや散歩のことを言う。ピジン・イングリッシュのウォカバウト（*wokabaot*）（あるいはハンガラウン *hangaraon*）もほぼ同じ意味で使う。こうした人々を，リリウ層と呼んでみよう。

フレイザーは，リリウ層が生まれる背景として，次のようなことを挙げている（Frazer 1985: 189）。1960年代までの出稼ぎは，リクルート船によるものが多かったが，それが1960年代後半に終了し，代わってホニアラ－マライタ間の定期船が就航するようになった。そこで住民は自分で自由に職探しに行けるようになり，多くの独身男性がホニアラに出ることになった。そして仕事が見つからないうちはぶらぶら歩きを続けるというわけである。

こうした層を含めて，ホニアラの人口は急増した。国勢調査によると，1976年に14,942人だったホニアラの人口は，1981年に20,824人，1986年には30,413人に膨れ上がった（Statistics Office 1995c: 23）。短期滞在者を入れると，この数はさらに大幅に増えると思われる。

Mさん（1962年生まれ）の事例はその典型である。Mさんは地元の小学校を4年生まで行ったあと，同じマライタ島内のフォテ（Fote）の小学校（SSEC）で全寮制のもと5，6年生を過ごした。そのあと同じフォテの聖書学校で2年間学んだ。

「生まれて初めてホニアラに行ったのは1975年だった。アウキへは父親とよく一緒に行っていたが，ホニアラにはそれまで行ったことがなかった。1979年にフォテの聖書学校を終えた後，1980年代前半は，よくホニアラに行っては戻ってきていた。あるときは1週間，あるときは1カ月というように。ホニアラ近郊の親戚の家に居候していた。また兄が当時SIPLで働いていたので，そこにも居候していた。職を探したが見つからなかった。ホニアラは今ほど大きなビルもなく，車も多くなかった。また，今ほど多くの若者がいたわけでもない」。

フレイザーが指摘するように，「ぶらぶら歩きをする者にとって，とくに青年男性にとって，失業状態にあるということはたいして問題ではなく，むしろ挑戦であり，さまざまな個人の戦略と結びついている。ぶらぶら歩きは一つのライフスタイルになっているのである」（Frazer 1985: 193）[13]。

ぶらぶら歩きを許す背景の一つには，ホニアラ在住の者は親戚が村から訪れて来たらそれを世話しなければならないという社会的通念がある。これは多くのホニアラ在住者にとって相当な負担になっているが，それを断ることはできないという規範が強く働いている。

Mさんは，その後，1984年から，親戚のすすめでソロモン諸島発展基金というNGOで働くようになった。このNGOはホニアラのオフィスにスタッフをかかえている以外は，各地の在村のスタッフを持つという形をとっており，Mさんもアノケロ村で在村スタッフになった。

町でぶらぶらしながら仕事を探しても，滅多に見つかるものではない。ある仕事といえば，お店（たいていは華人経営）の店員，工場労働者，建設労働者などである。

Nさん（1972年生まれ。言語グループはクワラアエ）の例は，運よく華人経営の店での仕事を手に入れた例である。

アノケロ村近くの集落で生まれのNさんは，2，3歳のころガダルカナル島に移住し，親とともにSIPLのプランテーション内で育った。幼稚園から小学校までSIPLが作った学校に通った。

「学校ではピジンが使われていた。最初自分はラングース［各言語グループの言語をピジンでラングース（*langus*）と呼んでいる。Nさんのラングースはクワラアエ語］しかしゃべれなかったのでつらかった。最初は黙っていた。北マライタのクワラ

アエ，ファタレカ，バイグ，トアンバイタもいたが，学校の中ではラングース禁止だった。学校でラングースをしゃべったら先生に木で叩かれた。だから早くピジンを習得できた。学校の外ではラングースをしゃべっていた」。

後年親の方はアノケロ村に移住した。クワラアエの父親にとって，ファタレカが中心のアノケロ村は母村ではない。しかし父親は，SIPL に来る前にアノケロ村に移住しており，SIPL をやめてからもアノケロ村に戻っている。

一方，Nさんは，父親についてマライタ島に帰ることはせず，1989年にホニアラに出ている。そこでやはりぶらぶらしながら仕事を探したのである。

「ビルの外側にS［3つの商店をもつ華人の経営者］の店の求人広告が出ていた。しかし，直接Sに言うのは怖かったので，家に帰って手紙を書いた。そしてそれを封筒に入れて郵便に投函した。家に手紙が来ていた。親からだろうかと思って見てみると，Sからだった。『朝9時に来なさい』と書いていた。すごくうれしかった。言われたとおり朝9時に行って，あいさつをして，一通り面接をして，それから働くことになった。Sの店の一つで，最初は売り子として，そのあとレジ係（cashier）として働いた。売り子のときの給料は2週間で150ドル，レジ係になってからは240ドルだった。Sの家に住み込むことになった。毎日中華料理を食べた。Sの妻はマライタ島のクワラアエの女だった。2年6カ月働いて，給料が上がらなかった。Sに賃上げを言った。しかし，Sは『賃金は上がっているのだが，NPF（National Provident Fund: 国民共済基金）に払っているから手取りは上がらない』と言った。怒ってSを殴り，逃げた。そののち，『帰ってこい』と言われたが，戻りたくなくて，戻らなかった」。

Sの店を飛び出したあと，Nさんは，精米工場で6カ月働き，1992年，1カ月だけアノケロ村に戻ったあと，再び，ホニアラの別の華人の店で働きはじめた。しかし3カ月後，母親が病気と聞いて村に戻る。翌1993年，母親の病気が快復したので，再びホニアラの精米工場で働いた。2年間働き，給料は320ドル（2週間）プラス残業代（100ドルなど）だった。精米工場で働いているときは，親戚の家に居候していた。そして1995年に村に戻って来た。「ホニアラで働くことは結局他人を利する（benefitim），あるいは他人を発展させる（developem）にすぎないから」（括弧内はNさんのピジン・イングリッシュによる言葉），というのが，「なぜ村に戻ってきたのか」という私の問いに対する答えだった。

8　未婚女性の出稼ぎ・移住

出稼ぎは基本的に男性の“役割”と見なされている。しかし，家族による移住の場合は女性も一緒に移住し，場合によっては賃労働をする（I－6のLさんの妻の例がそれである）。

さらに，未婚女性による出稼ぎもないわけではない。ただしプランテーションへの出稼ぎはほとんどなく，お手伝いさんとして働いたり，あるいは町の商店で働くといった場合が多い。I－7で見たリリウ層に近い形態だと考えられる[14]。

Iさん（1943年生まれ＝推定。言語グループはクワイオ）は，アウキ近くのガリガガラ（Ngaligagara）という村で生まれた。この村は，アノケロ村と同じく，マアシナ・ルールのときに大きくなった村で，マアシナ・ルールが終わると，Iさんの一家は，内陸の村に移住する。しかし，そののち，再び海岸のファラウという村に移住する。「市場でものを売るのに便利だから」というのがIさんの家族が移住を決めた理由だった。

1971年，Iさんは，単身でホニアラに出，いとこの女性のところで居候をすることになる。彼女の子どもの面倒を見るお手伝いさん（ピジン・イングリッシュで「ハウス・ゲレ haus gele」と呼ばれる）の役割を担った。同じ年，Iさんは，ホニアラのメンダナ・ホテルで今の夫のJさんに出会い，そのまま同棲生活に入ってしまう。

Oさん（1970年代半ば生まれ＝推定）も，Iさんより30年後に，似たコースをたどった。Oさんのお父さんのPさんは，アノケロ村生まれだが，以前マキラーホニアラ間の定期船の船長をしていたので，Oさんはマキラで生まれた。5歳くらいのときアノケロ村に戻り，そこの小学校に6年まで通い，そのあとはしばらく家で親の仕事の手伝いをしていた。

しかし，1993年にホニアラに出た。長兄がSIPLで働いていたのでそこに居候をし，ホニアラのある家でお手伝いさん（ハウス・ゲレ）をした。料理，掃除，洗濯，庭の手入れが主な仕事だった。数カ月後，今の夫（ブーゲンビル紛争によるPNGからの難民）とホニアラで出会い，結婚した。しばらくは夫の職場であったゲスト・ハウスで一緒に働いていたが，子どもができ，一緒に村へ戻った。夫はそののち単身でまたホニアラに働きに出ている（あとのI－11で述べるケースと同じ）。

未婚女性の単身出稼ぎは，男性に比べれば数は少ないものの，すでにライフスタイルの一つになっているといってもいい。

9　出稼ぎに出ないという選択

これまで出稼ぎ・移住の事例を紹介してきたが，出稼ぎに出ない人々もいる。いったん出稼ぎに出た人でも，その後長く出稼ぎに出ないというケースも少なくない。

I－4でとりあげたFさん（1942年生まれ）は，20歳のころ合計2年間ココヤシ・プランテーションで働いているが，その後，今に至るまで出稼ぎをしていない。ずっと村の生活である。

Fさんは，1965年に結婚した後，1966年にココヤシ園を作ってコプラ作りに励むようになり，また，カカオも（村の中では早い時期である）1975年ごろ栽培を始めた（カカオの栽培は政府の農業指導員が来て説明するのを見て始めた）。毎月コプラを作り，毎週カカオを収穫し，毎週金曜日には町の市場で野菜を売る。それらの収入は村人の平均収入を大きく上回っている。

「このくらい稼げるのだから，町で働く必要などない。町に働きに出ているわけでもないのに，もう自転車も買ったし，ミシンもチェンソーも買った。この自転車で町まで行くこともある。ホニアラやプランテーションで働いて老人になって村に帰ってきたらどうなりますか。お金は町で使い果たしてきて，村には自分の財産はない。ココヤシもカカオも畑もない。それではだめでしょう」。

I－4で見たように，結婚すると村にとどまるという規範があり，またそういう傾向がある（あった）のだが，Fさんの事例は，そういう規範や傾向のためというより，むしろ積極的に村に残るという選択を行っている例だと言える。

また，運よく地元に賃労働の口があった場合も，出稼ぎに出ないという選択肢をとることになる。

地元での賃労働の口はあまり多くないが，1960年代には公共事業として道路工事があった。また，近くのフォアブにある英国国教会の病院が以前もっと大きく，アノケロ村の住民も何人かそこにコックなどで雇われていた。また，地元の小学校の先生をやるという選択肢も，高学歴の人間にはある。

10　“教会の仕事”

ところで村の人々にライフヒストリーを聞いていると，“教会の仕事”というカテゴリーがあり，それが意外に重要な位置を占めていることに気づく。

Dさん（1925年ごろ生まれ＝推定）は，1949年から1959年までの11年間ココヤシ・プランテーション会社の船の機関士として働いていた。そのあと1962年から4年間

フォアブ病院の医師宅でハウス・ボーイとして働き，そのあとは11年間村の教会の牧師（pastor）として働いた。当時教会での仕事は無報酬だった。

現在アノケロ村の教会の牧師をつとめる[15] H さん（1943年生まれ）は，1958年から断続的に出稼ぎに出ていたが，1982年に帰村してからは，村で生活している。そして1990年代半ばから，自分の畑の仕事をしながら，牧師の仕事をしている（報酬は現在月40ドル）。もう出稼ぎに出ないのか，という質問に対する H さんの答えは，「教会の仕事があるので出稼ぎには出られない。主に仕える身だから」，というものだった。

I－5で取り上げた J さんは，1984年に村に戻ったのち，1985年から3年間アノケロ村を含む西クワラアエ地域全体の上級牧師（senior pastor）として働いた。村々を回り，村の牧師や住民に教示する役割だった。それを退いてからも，地域の教会へのアドバイザーとしての地位にいる。それで，H さんと同じく，「教会の仕事があるので［再び］出稼ぎには出られない」と言う。

近年（ここでは1990年代を指す）の傾向として，既婚男性の単身出稼ぎが増えていることがある。

その典型例は，I－6でとりあげた L さんである。L さんは，1991年，SIPL での仕事をやめ，家族とともにアノケロ村に戻ってそこで生活していた。しかし，1996年から再び出稼ぎに出る。今度は単身である。

村に戻りたくて戻ったという L さんが再び出稼ぎに出なければならなかった直接の理由は子供の学費である。L さんの子供のうち，現在（1996年）2人の子供が中学校（Secondary School）に通っており，その学費が合計年800ドルかかる。これは村で容易に稼げる額ではない。

ソロモン諸島では小学校の学費は無償だが，中学校以上は有償になる。中学校へ上がるには全国統一の試験に合格せねばならず，現在約3割の者しか入れない狭き門である[16]。将来の職へのアクセス度が上がるということもあり，子供が試験に合格して中学校に上がれるとなると，親にとってはたいへんうれしいことである。しかし，反面，学費の負担が悩みの種となる。

L さんは，村に妻や子を残してホニアラに単身で出，電気局（SIEA: Solomon Islands Electric Authority）との契約の建設事業を行っている。SIEA が一定額でLさんと契約し，L さんは8人の労働者を雇って建設を行っている。その多くは同じアノケロ村の出身者である。

SIPL 時代に家族で移住していた L さんが今回は単身である理由としては，（1）

パーマネントな労働ではないため，家族を呼ぶほど安定していない（実際，契約が終わると今度は別の契約を探すという形をLさんはとっている），（2）インフレもあり（ソロモン諸島のインフレ率は，1988–94年の年平均で12.7パーセント[17]と非常に高い），ホニアラで家族が生活するのは非常に高くつく，といった点がある。ちなみに政府の統計によるとによると，1990–1991年におけるホニアラでの1世帯当たりの生活費は760ドルであり（Statistics Office 1992）[18]，これはマライタ島村落部での1世帯当たりの生活費177ドル（(Statistics Office 1995b）より。ただしこれは1993年の数字）に比べてはるかに大きい。

村や家族と離れての出稼ぎはLさんにとって本意ではない。毎月1，2回は週末村に帰るという生活を繰り返している。「ホニアラで働いていても私の心はいつも村にある」とLさんは言う。

似たような形で単身ホニアラへ短期・中期の出稼ぎに出ている既婚男性が現在アノケロ村には数人いる。

Ⅱ　出稼ぎと移住の社会学

1　ライフコースにおける出稼ぎ

Ⅰでは，アノケロ村の人々が，1930年代から現在まで出稼ぎや移住を行ってきた様子を，事例から見てきた。図3は，これまで取り上げた人々を中心に，そのライフコースの中での出稼ぎの位置を図式化したものである。

この図からもわかるように，アノケロ村の住民たちは，1930年代から現在に至るまで一貫して，多くの男性が独身時代に単身出稼ぎを行っている。結婚してからは出稼ぎに出ないというパターンと共に，妻や家族を置いて出稼ぎに出る例も散見される。また1970年代以降は，SIPL への出稼ぎを中心に家族での出稼ぎも目立つ。一方，この図からは，独身時代の単身出稼ぎや結婚後の一時の出稼ぎのあと，長く出稼ぎに出ていないというパターンも多いことがうかがえる（上の年代の人ほどその傾向が強い）。

2　構造から見た出稼ぎと移住

これまで見てきたような住民たちの出稼ぎ・移住について，その背後にある構造を考えると，そこには近代世界システムが存在している。

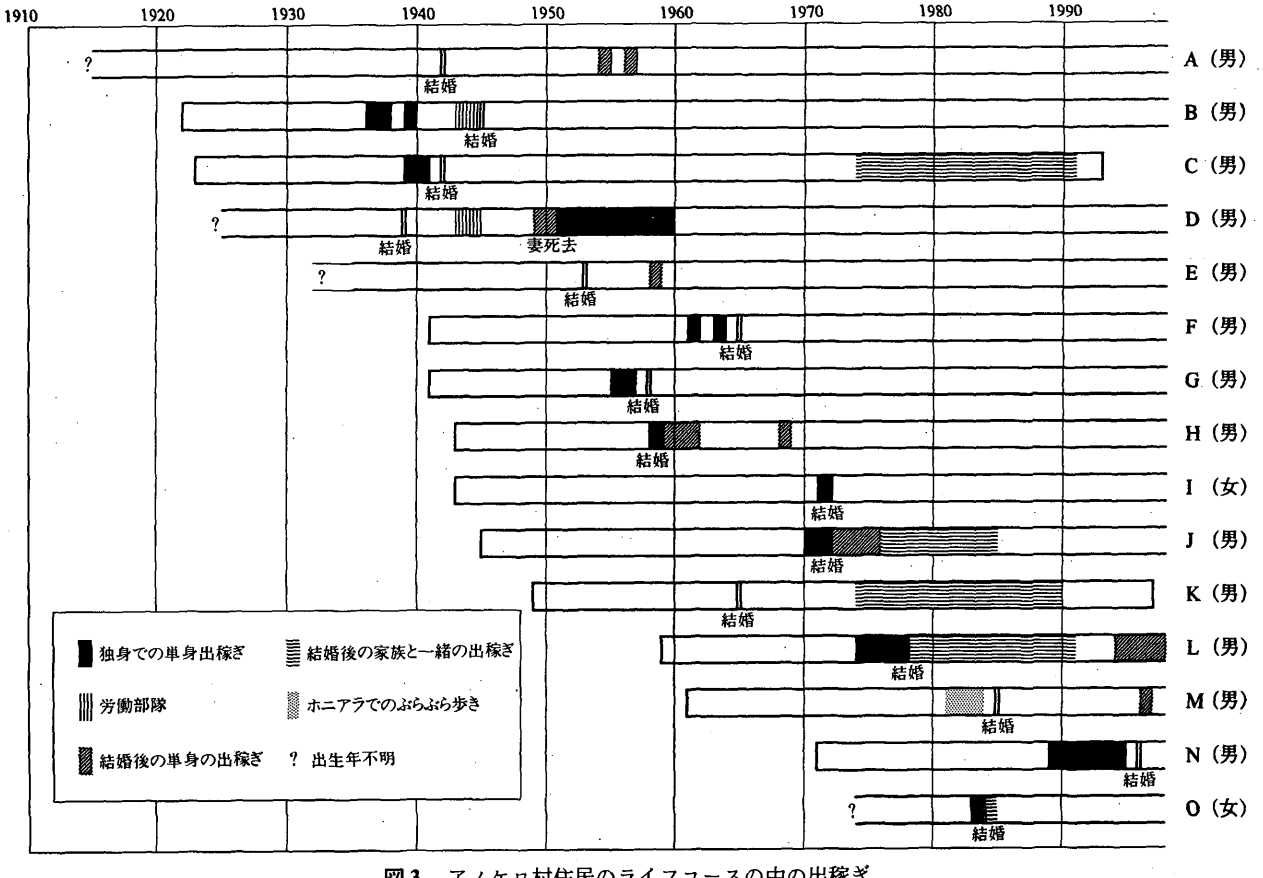

図3　アノケロ村住民のライフコースの中の出稼ぎ

世界システムの再編成過程の中で，前世紀末から今世紀にかけて，クインズランドとフィジーでは，大量のサトウキビ・プランテーション労働者が必要とされ，それがメラネシアから調達された。

ココヤシ・プランテーションは，すでにスリランカやフィリピンなどで19世紀から存在したが（スリランカでは当初はココナツ繊維用のプランテーションだった），19世紀末から，米国での石けんおよびマーガリン産業が伸長したことを背景に，熱帯各地，とくに列強の植民地にコプラ用のココヤシ・プランテーションが広がった。ソロモン諸島もその例外ではなかった。そしてそこに大量の労働力が必要とされ，ソロモン諸島内部から調達されたのである。衣料や煙草などの消費物資が華人商人らを媒介に流入したことと，植民地政府が税金を現金で納めさせるシステムをとったことは，ソロモン諸島民にプランテーションへの出稼ぎを促し，プランテーション経営者側からすると労働力調達を容易にした。

その多くが当初は単身の男性がほとんどだったこと，また6か月～2年の短期の還流移民だったこともまた世界システムの構造から説明ができる。

かつて C. メイヤスーがマルクス主義の用語を使いながら議論したように，還流移民によって資本の側は，出稼ぎ期間だけ，しかも出稼ぎ労働者自身の労働力の（短期の）再生産に必要な賃金だけ払っていればよく，その家族の再生産や将来への必要な投資は，出稼ぎ労働者が所属する共同体に押し付けているのである（メイヤスー1977）。村に帰れば食うには困らないという状況，つまり村におけるさまざまなストックが存在していて，それへのアクセスが保障されている状況では，単身出稼ぎであるかぎり，その家族を養う分までの賃金は必要なく，ぎりぎりの低賃金でも労働力の再生産ができるのである。逆に言うと，低賃金であるがゆえに，出稼ぎ労働者側は，歴史的ストックを再び利用するために村に戻らざるをえない。こうして還流移民が再生産される。還流移民は，プランテーション経営者からは，大量の安い労働力を調達するうまいシステムだったのである。

3　生活戦略から見た出稼ぎと移住

世界の構造から出稼ぎや移住を考えると前節のようになる。しかし，構造からのみ出稼ぎや移住を考えるのは適切でない。なぜなら，そこでは住民の主体的な選択という側面が無視される。いかなる社会行動も，構造によって選ばされている側面と，自ら選んでいる側面との二面性がある。構造に注目すると同時に，住民がいかなる生活戦略（livelihood strategy）の中で出稼ぎや移住を選んでいるのか，あるいは選んで

いないのか，ということに注目する必要がある。とくに地域の今後の開発／発展を考えるときには，住民の生活戦略がまず中心に置かれるべきである。

住民の生活戦略から見た場合，出稼ぎや移住について以下の4点が指摘できる。

第1に，出稼ぎに出る理由は，貨幣経済へのアクセスである。村に残っても貨幣経済部門にコミットすることは可能だが（コプラやカカオの生産，農作物の市場での販売などによって），出稼ぎに出るほうが得られる収入の上で有利である。戦前は税金を払うためと衣類などの消費物資を購入するためという側面が強かったが，戦後は消費物資中心，そして最近は子供の学費などがそれに加わっている。ただ，貨幣経済への参加という側面がストレートに出稼ぎを促しているわけでもなく，リリウ層のところで見たように，出稼ぎ・移住がある種のライフスタイルとして定着しているという側面も見逃せない。

第2に，（短期の出稼ぎであれ長期の出稼ぎであれ）結局村に戻ってくる理由の1つは，村における歴史的ストックの存在である。村には歴史的に蓄積してきた栽培—半栽培—野生の種々の環境資源がある。また，それらを共同で使う権利（共同利用権）も社会的通念として存在している[19]。そうしたものがあるから結局戻ってくるし，また，妻や子を残してそれらの維持・利用をさせることで出稼ぎのコストを大幅に下げるということもなされる。自給経済部門と貨幣経済部門を組み合わせる生活戦略を私は“住民の二重戦略”と呼んでいる（宮内 1995）が，ここでは村の自給経済部門（プラス貨幣経済部門）と出稼ぎを組み合わせる二重戦略がとられているのである[20]。

第3に，このことは，裏を返せば，出稼ぎ先における歴史的ストックの不在である。Nさんが言った「ホニアラで働くことは結局他人を利するにすぎない」という言葉は，他の住民からもよく聞かれる言葉である。あるいは「村では自分が主人になれる」という言葉も聞かれる。出稼ぎ先での土地や貨幣経済部門そのものについて主役になれないので，そこでストックを蓄積することはできない。また，出稼ぎはたいていパーマネントな雇用ではなく，非常に不安定である。それに対して村の歴史的ストックは比較的安定しており，頼るに足る。公務員のようなパーマネントな雇用を得られたとしても，老後を含めた将来まで安定が保障される訳ではないので，定年退職後（あるいは定年の前に）やはり村に戻ってくることが多い。

第4に，以上述べた点は，世帯によって微妙に条件が違っており，各世帯はそれぞれの条件にしたがって，それぞれの戦略を立てている。子供の学費などで貨幣経済部門へのコミットメントが強く求められる場合は，出稼ぎを選択するが，その場合にも，どれだけコミットメントが必要か，あるいは比較的安定した雇用が得られたかどうか

などによってそれが単身になるか，家族移住になるか，あるいは短期になるか，長期になるかが選択される。基本的には村の歴史的ストックと出稼ぎ先での貨幣経済部門との引っ張り合いの中で，各世帯がさまざまな生活戦略の諸類型の間をうろうろさまよっていると言える。

おわりに

本稿では，ソロモン諸島マライタ島の出稼ぎや移住について，アノケロ村住民の聞き取りを中心に，記述し，分析を加えた。

住民たちは，まず海岸部への移住を経験したあと，プランテーションへの出稼ぎを経験し，また，第二次大戦直後は労働部隊で労働を経験した。戦前から今日まで，多くの男性が独身時代に単身での出稼ぎを経験している。それはココヤシ・プランテーションがほとんどだったが，のち，大工としての労働や町の商店での労働など，労働の中身も多様化してきた。また1970年代からは家族での出稼ぎも一般化し，また独身女性の単身出稼ぎも一般化した。しかし一方で，独身時代の出稼ぎ，あるいは結婚後の一時の出稼ぎのあと，村に戻って村で生活を続けるというパターンもまた強固なものとしてある。

こうした，単身の還流移民を中心とした出稼ぎのパターンの背景には，世界システムがそうした労働力を大量に必要としたということがあった。一方，住民の生活戦略の側から見ると，それは，村の歴史的ストックと貨幣経済部門の中で，双方から利益を得ようとしてさまざまなバリエーションの生活選択を行っているということになる。

注

1) 短期・中期の移動が少なくないので，固定した数字は押さえられない。
2) アノケロ村の社会史全体については稿を改めて書く予定である。
3) たとえば，I－8で取り上げるIさん（女性）の例でも，彼女の出身地でおよそ同じような移住のパターンが繰り返されていることがわかる。
4) ジュディス・ベネットは，政府の誘導とサツマイモの導入が，海岸部への移住に大きな役割を果たしたと論じている（Bennett 1987: 193–194）。
5) この節で簡述した，海岸部への移住やマアシナ・ルールの経験について，詳しくは稿を改めて論じる予定である。
6) 「ブラック・バーディング」がどういう性格のものであったかについては，（棚橋訓 1989）の整理を参照。
7) マライタ島に人頭税を課したマライタ地区行政官 W. R. ベルが1922年に住民によって殺

された事件は，今日でも多くのマライタ島住民に語りつがれている。

8) ソロモン諸島民の労働部隊体験については，White, Gegeo, Akin and Watson-Gegeo eds. (1988) を参照。

9) この労働部隊での経験が，そのすぐあとのマアシナ・ルールにつながっている，という解釈がされる場合が多いが，アノケロ村での聞き取りでは，そこまでの因果関係が語られることはなかった。

10) フレイザーは，同じ北マライタの言語グループであるトアンバイタ (To'amba'eta) について同様の傾向があることを論じている (Frazer 1985: 188)。

11) 他の住民からの聞き取りでは，他にも，船で大砲を撃って労働力徴集中であることを知らせる方法などがあった。

12) 政府や民間の建設事業において，総額いくらで請け負うという形で引き受け，労働者——多くの場合友人や親戚，同郷の者を雇う——を雇って仕事をする者。

13) 松田素二は，ケニアにおける首都ナイロビへの出稼ぎ民についていくつかの説を検討したあと，「ではなぜ人は村を出て町へと向かうのだろうか。その答えはまだ出せない。今言えることは，若い男たちが都市に出稼ぎに出かけることは，今日の当り前のライフスタイルとして定着しており，彼らはそれに特別な意味を与える語りを用意していないということだけである」と述べている (松田素二 1996: 66)。これはソロモン諸島のリリウ層についても当てはまる。

14) オセアニアにおける女性の出稼ぎについては，Connell (1984) も参照。

15) アノケロ村のキリスト教会では，牧師は選挙によって選出される。

16) Statistics Office (1995a) の数字から，中学校 (Secondary School) 第1学年 (Form 1) 在学者数を小学校 (Primary School) 第6学年 (Standard 6) 在学者数で割ると28.4パーセントになる。同じ計算だと，中学校第4学年 (Form 4) に上がれる生徒は10.4パーセントである。ちなみに小学校在学者は学齢期の子どもの74.0パーセントである。

17) Statistics Office (1995c) より計算。

18) ソロモン諸島国民に限定した数字。

19) 歴史的ストックや共同利用権については宮内 (1998a; 1998b) で詳しく論じたので参照されたい。

20) リチャード・カーテンは，パプアニューギニアの出稼ぎ移民を研究する中で，ほぼ同じことを論じている。「出稼ぎは，小農世帯の生存に欠かせない要素となった。出稼ぎによって，小農世帯は村落経済と都市・プランテーション経済とを二股かけて (straddle) いる。女性や年配の家長は家に残るか，家に戻ってきて生産を維持し，一方，村での生産部門にとって不可欠ではないメンバーは村を離れて賃金を稼ぎ，そうしてお金をもって家に帰るのである」(Curtain 1981: 203)。

文　　献

Bennett, Judith
1987 *Wealth of the Solomons: A History of a Pacific Archipelago, 1800–1978*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Central Bank of Solomon Islands
1996 *Annual Report*. Honiara: Central Bank of Solomon Islands.

Connell, John (ed.)
1990 *Migration and Development in the South Pacific*. (*Pacific Research Monograph* No. 24). Canberra: National Centre for Development Studies, Australian National University.

Connell, John
1984 Status or Subjugation? Women, Migration and Development in the South Pacific. *International Migration Review* 18, 964–983.

Curtain, R.
1981 Migration in Papua New Guinea: the Role of the Peasant Household in a Strategy of Survival. In G.W. Jones and H.V. Richter (eds) *Population Mobility and Develop-*

ment: Southeast Asia and the Pacific, pp. 184–204. Canberra: Development Studies Centre, Australian National University.

Douglas, Norman and Ngaire Douglas (eds)
1989 *Pacific Islands Yearbook (16th edition)*. North Ryde: Angus & Robertson Publishers.

Frazer, Ian
1985 Walkabout and Urban Movement: A Melanesian Case Study. *Pacific Viewpoint* 26(1), 185–205.

Frazer, Ian
1990 Maasina Rule and Solomon Islands Labour History. In Moore, C., J. Leckie and D. Munro (eds) *Labour in the South Pacific*, pp. 191–203. Townsville: Department of History and Politics, and Melanesian Studies Centre, James Cook University of North Queensland.

メイヤスー，C.
1977 『家族制共同体の理論——経済人類学の課題』川田順造，原口武彦訳，東京：筑摩書房。

Munro, Doug
1990 The Origins of Labourers in the South Pacific: Commentary and Statistics. In C. Moore, J. Leckie and D. Munro (eds) *Labour in the Pacific*, pp. xxxix–1i. Townsville: Department of History and Politics, and Melanesian Studies Centre, James Cook University of North Queensland.

Statistics Office
1987 *1985/6 Statistical Yearbook*. Honiara: Statistics Office (Solomon Islands).
1992 *Honiara Household Income and Expenditure Survey 1990/91*. Honiara: Statistics Office (Solomon Islands).
1995a *Education Statistics 1995* (*Statistical Bulletin* No. 03/96). Honiara: Statistics Office (Solomon Islands).
1995b *Rural Areas of Solomon Islands: Income and Expenditure Survey 1993* (*Statistical Bulletin* No. 18/95). Honiara: Statistics Office (Solomon Islands).
1995c *Solomon Islands 1993 Statistical Yearbook*. Honiara: Statistics Office (Solomon Islands).

松田素二
1990 「拘束と創造——アフリカ都市出稼ぎ民形成のダイナミズム：ケニア，マラゴリ人の場合」『歴史学研究』612, 31–43。
1996 『都市を飼い慣らす——アフリカの都市人類学』東京：河出書房新社。

宮内泰介
1995 「太平洋島嶼部における家族の二重戦略：ソロモン諸島アノケロ村の事例から」佐藤幸男編『南太平洋島嶼国・地域の開発と文化変容——「持続可能な開発」論の批判的検討』pp. 101–120, 名古屋大学大学院国際開発研究科。
1998a 「重層的な環境利用と共同利用権——ソロモン諸島マライタ島の事例から」『環境社会学研究』4, 125–141。
1998b 「発展途上国と環境問題——ソロモン諸島の事例から」飯島伸子・舩橋晴俊編『講座社会学・12・環境』pp. 163–190, 東京：東京大学出版会。

小倉充夫
1995 『労働移動と社会変動——ザンビアの人々の営みから』東京：有信堂。

棚橋　訓
1989 「ソロモン諸島と労働交易——修正論の検討を中心とする覚書」慶応義塾大学民族学考古学研究室編『考古学の世界』pp. 165–180, 東京：新人物往来社。
1996 「出稼ぎと労働移動」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌』pp. 336–345, 東京：明石書店。

White, G., D. Gegeo, D. Akin and K. Watson-Gegeo (eds)
1998 *The Big Death: Islanders Remember World War II*. Honiara: University of the South Pacific and Solomon Islands College of Higher Education.